



## 次世代通信機器の 共通プラットフォーム技術を 担う。

通信システム事業本部  
共通技術センタ長  
藤原 雄彦

通信機器の先進かつタイムリーな商品化を支援する「共通技術センタ」。

子供の頃から大のメカ好き。学生時代は、機械工学科でFA (Factory Automation) の要素技術である歯車・機構学を研究し、もの作りを通じて世の中や会社に貢献したい思いを持っていました。当時は電気産業が花形であり、ちょうど「アナログ技術からデジタル技術へ」という大きな変革期。そんな中、電気系のメーカーであっても機械技術者は必要なはずであり、さらに人員の少ない機械系の部署であれば、出世も期待できるであろうという、したたかな考えで、当時総合エレクトロニクスメーカーとして名が知れていたOKIを志望。面接試験では、「どんな仕事でもやります」と、豪語し、採用されました。しかし、配属の段では、ソフトウェア部門への打診もあったにもかかわらず、強くハードウェア部門を希望し、めでたくハードウェア機構の開発部門へ配属されました。

入社後約2年間は、プリント基板の強度や材料特性などといった実験やシミュレーションの繰り返し。まるで、大学の研究室と変わらない毎日でした。そして、3年目以降は、局用ノード装置やサブシステムにおける小型化・高密度化・高速化を実現する設計技術など、NTTの研究所との共同開発プロジェクトに従事。この間、技術・製品開発の最前線で、ハイレベルな顧客要求に対応する厳しさを痛感しました。やがて、IPネットワークの普及とともに、パートナー製品のシステムインテグレーションや、キャリア向けVoIP装置の商品企画を経験するなど、長い間、通信機器の技術に携わってきました。

近年の通信市場は、グローバルベンダの台頭などがあり、競争が激化しています。また、スマートフォンの本格普及により、アップル、グーグル、フェイスブック、アマゾンなどのOTT(Over The Top)がサービス提供基盤への市場参入が相次ぐなど、これまでにないパラダイムシフトの波が押し寄せています。通信機器メーカーとしては、この

ような市場動向や技術動向をいち早くキャッチアップし、タイムリーに市場投入できるような体制が求められています。そこで、通信システム事業本部では、一昨年、通信機器の共通プラットフォーム技術を構築する「共通技術センタ」を発足。現在、私はセンタ長として、技術マネジメントに携わっています。

私たちが手掛ける共通プラットフォームは、実に広範で、さまざまな要素技術の集合体でもあります。現在、最も注力しているのは、今後の通信機器のハードウェア開発に必須となる、小型・高密度技術、高速信号伝送技術、エコ材料利用技術の開発・構築。また、最近の技術トレンドである省電力、無線干渉を考慮したEMC (Electro-Magnetic Compatibility)、製品安全などの共通技術、さらには、設計TAT短縮や設計品質の向上を図る各種解析技術の構築にも取り組んでいます。

これらの活動の目的は、事業部門の商品ロードマップに整合した技術をタイムリーに提供すること。そのため、事業部門とは常に密に連携し、年度の開発アイテムの取捨選択を行っています。当然のことながら、技術構築にあたっては、工場部門(生産技術)との連携も必須です。このように、商品計画・技術計画・生産計画の3つのセクションが有機的に連動できる仕組みを構築することで、最先端のニーズにジャストフィットした製品の市場投入が可能になるのです。

今後は、ハードウェアだけではなく、ソフトウェアの生産性向上を実現する開発ツールや、汎用性の高いOSやミドルウェアの一部をソフトウェアプラットフォームとして構築していくつもりです。そして、私たちが提供したプラットフォーム技術が適用されたOKIの通信機器が、競合に打ち勝つことを信じて、センタの総力をあげて、アグレッシブでスピーディな活動を推進していきます。